中東を動かす帰属意識

Hayashi Mikio
林　幹雄

近くの隣人より、遠くの血縁

動き出す中東、世界を変える波に乗り遅れるな！

近年、アラブ諸国が次々にイスラエルと国交を樹立――この動きは加速し、世界情勢を一変させるだろう。今後の世界を読み解く鍵は中東にある。現地に長年駐在してビジネス経験を積み、独特な社会を研究し続けた著者が紹介する、知られざる中東の姿。

世界を目指すビジネスマンや中東研究者必読の書！

発刊に寄せて

私が筆者の林幹雄さんに最初にお会いしたのは、当時小生が所属していた中東調査会の勉強会であっただろうか。毎週木曜日に開催される勉強会のレギュラー・メンバーで、活発に行なわれていたその発言の端々に、アラブ・中東世界に対する造詣の深さが現れていた。失礼な言い方にはなるが、中東に長く滞在されただけの商社マンや外交官ではないことはすぐにわかった。あとでわかったことだが、大阪外語大学のアラビア語学科を修められ、古典から宗教、部族といった幅広い知識の上に、実世界での経験に裏打ちされた分析を展開していた。小生の師であり、中東研究、特に中東に向き合う姿勢には極めて厳しかった故黒田壽郎（としお）先生が認めていたのも不思議ではない。

その林さんが、雑誌「みるとす」に連載を始めたのが二〇一七年。中東世界の宗教や民族を歴史・思想という視点から、現代社会における現象をも解説する形でわかりやすく著していく、その文章は不思議と読者を引き込む。この連載を取りまとめる形で今般、本書が刊行されたことは意義深い。これから中東研究を目指す研究者にも、ビジネスマンにも役立つ書となろう。

アラブ・中東世界は、日本人にとってなじみが浅いだけではない。西欧社会からの情報が優先し、誤解と偏見に満ち溢れた形で伝えられている。この世界を理解するには宗教的・民族的な考察が不可欠である。しかしながら、たとえば宗教一つ取っても、イスラームを軸とする中東世界の諸宗教が理解されないままに、なぜか過激で時代遅れの宗教世界というイメージばかりが先行してはいまいか。中東社会を理解するために不可欠の民族的・歴史的考察抜きに、社会の後進性がイメージとして定着する。アラブ・中東世界にとって砂漠は重要な社会的伝統を提供するが、砂漠や土漠のイメージばかりが先行し、歴史の上でも現代においても重要な要素であり続けている都市性や海洋とのかかわりは、一瞥すらされない。

このような見方では、アラブ・中東世界を理解することは到底かなわない。これに対して本書は、極めて広範な視点から、現代の中東世界・社会を理解していくために不可欠な知識を学際的に提供している。その上に立って時折、著者らしい解釈がなされ「林ワールド」を構築していく。

この書を読み終えた方は、排他的と誤解していたイスラームの寛容さをはじめとし、自らの知識が断片的であったことを知るであろう。アラブ・中東世界を知ろうとする者は、一つ事象を理解するたびに、世界に対して、より謙虚で広範な視野が必要であったことを痛感する。まさに本書は、林さんが感じたことを体系的に追体験させる。そしておそらく「こんな社会であれば、行ってみたい」と思う読者も少なくないと思わせる。

アラビア語専門の林さんは、マシュリク地域からアラビア半島まで幅広い知識と経験を有している。その一方で、非アラブの民族・宗教にも造詣が深かったことまでは知らなかった。自分の浅学と無知を恥じつつ、本書の発刊にあたり、一人でも多くの人がこの書に接することを祈念したい。

林さんと共に、一日も早くアラブ・中東世界に安寧が訪れる日が来ることを祈りつつ。

埼玉県知事　㈶中東調査会参与　大野元裕（もとひろ）

中東を動かす帰属意識――近くの隣人より、遠くの血縁／目次

発刊に寄せて……大野元裕　1

第1部　部族とイスラーム

第1章　部族で構成された社会　13
第2章　部族社会を支える連帯と帰属意識　21
第3章　イスラームが興った頃のアラビア半島　29
第4章　交易と巡礼の道　39
第5章　イスラームの興りとユダヤ教　47
第6章　部族の統治と刑罰　55
第7章　イスラーム統治の広がりとシーア派　63
第8章　イスラームの信仰　73

第9章　イスラームの分派とイスラーム社会の指導者　83
第10章　婚姻事情と家族法　93
第11章　離婚のルール　101
第12章　来世と聖者廟（びょう）　109
第13章　モスクの基本構造　119
第14章　イスラーム都市の歴史的景観　129

第2部　インド洋を渡った南アラビア人

第15章　海洋交易で広がったイスラーム　137
第16章　環インド洋沿岸域に根付いたイスラーム社会　145
第17章　東アフリカに進出したオマーンとイバード派　153
第18章　イスラーム世界の奴隷　163
第19章　外国人労働者の境遇とビジネス環境　171

第3部　宗教マイノリティと帰属意識

第20章　ザイド派の部族社会　181
第21章　北イラクのクルド人　185
第22章　クルド人とヤズィーディー　193
第23章　クルディスタンのヤルサン教団　201
第24章　イラクに根付いたキリスト教　209
第25章　クルディスタンのユダヤ人　217
第26章　湾岸産油国の対イスラエル政策の変化　225

用語解説　233
引用文献　243
解説……塩尻和子　248
あとがき　256

ロシア
カザフスタン
ウズベキスタン
キルギスタン
グルジア
アルメニア
アゼルバイジャン
トルクメニスタン
タジキスタン
トルコ
キプロス
シリア
レバノン
イスラエル
アフガニスタン
イラン
イラク
ヨルダン
バハレーン
カタル
クウェイト
パキスタン
リビア
エジプト
サウジアラビア
アラブ首長国連邦
オマーン
チャド
スーダン
エリトリア
イエメン
0
500
1000km
中央アフリカ共和国
南スーダン
エチオピア
ジブチ
ソマリア

中東地図

凡例

一、本文中に※で数字を付した注釈は、見開き頁毎に左脇に示した。

一、主要な用語については、巻末の用語解説を参照のこと。

一、クルアーンは『日亜対訳・注解　聖クルアーン』（日本ムスリム協会）、聖書は『聖書　聖書協会共同訳』（日本聖書協会）から引用した。

一、引用されている文献について、邦訳がない場合は書名を日本語に訳した上で原書名を（　）で記した。

一、図版・写真の出所は〔　〕で示した。

中東を動かす帰属意識——近くの隣人より、遠くの血縁

第1部　部族とイスラーム

第1章　部族で構成された社会

日本からは距離的にも文化的にも離れた中東については、他の国際社会からの情報に左右されがちである。経済的な結びつきが限定的であることから、中東に居住する日本人も多くない。そのため、中東社会を理解する人も限られているのが現実である。

中東を理解するには、世界の政治・経済を左右する産油国やエネルギー輸送を巡る事情に加えて、北アフリカのマグレブ（リビア以西の北西アフリカを指す）からイランやアフガニスタンを結ぶ広大な地域の歴史や民族を知ることが欠かせない。

そのためには、中東・北アフリカ地域の人々には、領域国家の枠を超えて繋がる共通項があると知っておきたい。一つは言語であり、一つは血縁集団であり、そしてエルサレムを共通の聖地だと主張する三大一神教（ユダヤ、キリスト、イスラーム）である。

本書では、おしなべて中東とされる「中東・北アフリカ」の社会事情と、その住民の多くが帰依するイスラームについての理解を深めるため、筆者の経験も踏まえながら概説していきたい。

中東の民族

多様な民族で構成される中東だが、言語グループと

属する民族は次の三つに大別できる。

①印欧語族――イラン系アーリア人で、代表する民族は、ペルシア語を母国語とする人々とクルド人

②アルタイ語族――トルコから中央アジア諸国に広がるチュルク人[※1]

③セム語族――主にユダヤ人とアラブ人で、南アラビアと歴史的に関係の深いエチオピア人も含まれる

この中で最大の人口規模を持つアラブ人社会は単一民族ではなく、異なるルーツの集団で構成されている。アラブ人の定義は厳密な意味では難しい。アラブで過ごしていると、自分たちのルーツはアラビア半島にあると信じている人々がアラブ人であるとか、また、それにイスラーム教徒であるという括りを加えるべきだという人もいる。

一方でキリスト教徒のように、非イスラームのアラブ人もいる。誇り高きエジプトに行くと、アラビア半島社会の遊牧民は「アラブ」、自分たちは「マスリー」[※2]だと区別し、エジプト人のアイデンティティを主張する人が大勢いる。

そのような違いを気にしなくてよい日本人にとっては、アラブ人とは、中東や北アフリカに居住し、アラビア語を共通に母語としている人々だと広義で捉えておけば分かりやすい。イランでも人口の五%程はアラブ人であるし、イラクで人口の過半数を占めるシーア派の住人もアラブ人である。イスラエルのパレスチナ系住民もアラブ人である。[※3]

イスラームが台頭する以前の紀元前一世紀頃、セム系言語（アラビア語を含む）が使用されていた地域は、小アジア以南、つまり現在のシリアから、東南部を除くアラビア半島、北アフリカの地中海沿岸、そして現在のエチオピアと考えられている。

イスラームが浸透すると、ハム語系であるコプト語が使用されていたエジプトを筆頭格として「アラブ人」でない地域も、アラビア語で著された聖典クルアーンを通じて、言語も広く浸透し、母語がアラビア語に移っていった。今ではアラビア半島の東南部、エジプト、スーダン、また北アフリカという広い範囲でアラビア語が母語となり、地域全体の共通語となっている。

この地域、特にセム語を母語としてきた一円には共通に部族社会という特徴がある。

一方、イスラーム化したにもかかわらず、アラビア語が母語とならなかった民族もある。その代表的存在は、ペルシア語を使うイランや同じ語族に属するクルド、そして、トルコ語を使うチュルク系の民族である。無論、クルアーンを学ぶ宗教指導者や一部の知識階級はアラビア語を習得しているが、そうではない大半の人々は、アラビア語から母語に翻訳されたクルアーンでイスラームを学ぶ。なお、トルコは今ではラテン文字を使っているが、それまでオスマン語はアラビア文字で表記されていた。ペルシア語もアラビア文字で記されている。

部族

部族という言葉を聞くと、アフリカや南米の内陸部で生活してきた未開地の住民のような集団を思い浮かべがちだが、中東の部族はそうではない。基本は血縁で結ばれる人々の集団である。アラビア半島の砂漠では遊牧民のイメージが強くなるが、まさに映画「アラビアのロレンス」で部族長の指揮の下、家畜と共に移動するベドウィン集団を連想すればよい。

中東、特にアラビア半島では、人々の帰属意識が領域国家にあることは少ない。地域にもよるが、多くの場合、住民の帰属意識は血縁部族にあり、次に宗教グ

※1　チュルク諸語を母語とする人々。中東の最大人口はトルコ共和国のトルコ民族である。ユーラシア中央部にあった突厥可汗（とつけつかがん）国もチュルク民族である。チュルク系遊牧民集団だったセルジューク朝が台頭、アナトリアに進出した。ソ連邦崩壊後に独立したアゼルバイジャン、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギスタン、トルクメニスタンもチュルク系民族の国家で、その東方に住むウィグル族もやはりチュルク系である。

※2　「ミスル（Misr）」は、ウマイヤ朝時代からのイスラーム王朝が征服地で造った軍営都市を指す。エジプトでは、カイロのフスタートがその軍営都市に当たる。今は、ミスルはエジプト国家を表しているが、口語では「マスル」と発音される。マスリーは「エジプト人」の意味。

※3　アラブ人とは歴史的にはもともとアラビア半島に住み、後に中東地域に広く進出した人々。イスラームにより、民族的アイデンティティを与えられたアラブは、カリフの指導の下に大規模な征服を行ない、大帝国を建設してその支配者集団となった。アラビア語は帝国唯一の公用語・共通語とされ、征服地の住民はアラビア語を自らの言語とすることによって、アラブ化した。しかし、このような非アラブのアラブ化は、逆に、アラブをして彼らの民族意識を希薄にさせる結果となった。

ループにあると言えよう。まず、中東、特にアラブ社会を構成している部族とはどのようなものか、説明しておきたい。

アラブの部族

アラブの「部族」とは、言い換えると「同祖意識を共通にする血縁で繋がる人々」の集団と言える。

二〇〇三年のイラク戦争では、日本の自衛隊がイラクのサマーワに派遣されたが、現地での取り組みについて、地元部族からの協力を得ることが重要だったと伝えられた。誘拐事件での人質の解放や多種多様な問題を解決するには、部族の持っている伝手（つて）や、発言力を持つ有力部族の協力が有効とされるのがアラブ社会である。イラク戦争後も、イラクの治安を安定化させるために米軍は部族民の協力を求め、ある程度の成功を収めた。これらの取り組みによって、イラクでは今もなお部族社会が影響力を有している現実が世界にも知られるようになった。しかし、それはイラクの地方だけに見られる事態ではなく、中東のアラブ社会に共通な現実である。

サウジアラビアを統治する首長家「サウード家」も一つの部族である。アラブ首長国連邦（ＵＡＥ）を構成するナヒヤーン家、ドバイのマクトゥーム家も含め、七首長国の君主各々が、規模は別として、部族社会を統率する立場にある首長家の出身である。その首長が今、君主として領域国家を機能させている。湾岸諸国で最も人口の少ないカタルは、限られた部族で構成された国家であるが、オマーンでは二〇〇を超える部族が登録されている。サウジアラビアの地方に行けば、部族集団毎に形成されている集落が数多く点在する社会が残っている。

そのような部族社会の統治で共通しているのは、部族による首長への忠誠[※4]であろう。その忠誠がアラビア半島の部族社会を支えている。それを実感させる一例は飛び地である。たとえば、ＵＡＥの行政統治下にあるはずの地域にオマーンが主権を有する飛び地がある（次頁の地図参照）。ホルムズ海峡に面するムサンダム半島にあるマダ、先端部のハサブなどの地域である。その地を仕切っていた部族は、英国の撤収によりＵＡＥが誕生した際、ＵＡＥに参加することなく、オマーンのスルターンに忠誠を示した。

世俗化をうたう領域国家が中東に誕生しても、血縁

が重視される社会は生き続けており、それは西側諸国がイメージするような自由や民主化を阻(はば)む一因でもある。このように社会に根付く部族を把握することは、中東の社会事情の理解を深める一助となる。

東アフリカと共存する南アラビア

アラビア半島の南西にあるイエメンは「アラブの源流」と呼ばれている。実際、アラビア半島、さらにはイラクやシリアなどのアラブ社会では、自分たちのルーツはイエメンにあると認識している人が多い。一方そのイエメンは、かつて鎖国状態が長かったこともあり、今もなお近代化から取り残され、昔から続く伝統的アラブ社会を多く残している。それ故に、イエメン社会から学び得られる知識や経験は、中東、特にアラビア半島社会を理解する上で欠かせない、非常に有用な知見となる。

人類の移動について、今では、アフリカにいた人類がユーラシア大陸に移動したとする説が有力視されて

※4　「忠誠の誓い」と訳されるアラビア語「バイア بَيْعَة」、臣従の誓いやその儀式のこと。ある人の権威を認め、服従の意向を表す契約行為と見なされるが、この「バイア」という単語は、売買する「bāʿa بَاعَ」という語根からの派生語である。

いる。移動ルートとしては、ナイル川に沿って北上し、下流のエジプトのデルタ地帯からシナイ半島を経由して移動したとする北ルート、また、アフリカ大陸の東端ソマリア、ジブチやエチオピアの一部で構成されている「アフリカの角」を経て現在のイエメンに渡ったとする南ルートのいずれかだとされている。

今では、チョークポイント（戦略的に重要な海上水路）として地政学的に重視されているバーブ・エル・マンデブ海峡がアフリカとアラビア半島を分けているが、遠い昔に、アフリカの角とアラビア半島は陸繋がりだった。エチオピアでは今でもセム系言語のアムハラ語が公用語として使われている事実からも、アフリカの角を挟む両岸は言語を共通とする同じ文化圏であり、海峡を挟んで経済的に共存する地域であったことは明らかである。

二千年の時を遡（さかのぼ）ると、東アフリカでハバシュと称された人々が、イエメンに進出していた歴史もある。[※5]

古来より続く共存社会

アラビア半島に居着いた人々は農耕社会を形成した。それは、今のサウジアラビアの南西部、イエメンそしてオマーン西部のドファール地方一帯の雨量が豊富な地域である。降雨と地下水から緑に恵まれた山岳地帯には「ニムル（豹（ヒョウ））」も生息していたほどである。今では絶滅が危惧され保護運動も盛んになっているが、ニムル山など豹に由来する地名が各地に残っている。

一方、ドファール地方以東になると海岸線までが砂に覆われる地勢となり、農耕には恵まれない。そのためか、半島の東南部オマーン湾に面する地域では、古代、インドやペルシアのアーリア系民族が進出した。

エチオピアやソマリアから移住した住民も多く、対岸のアフリカの角との海上交易は盛んである。今も、モカ港（イエメン）に行けば、海峡を往来する小型貨物船を見ることができる。コーヒーで知られるモカも、東アフリカ産の豆を集荷したアラビア半島の交易港の名前に由来する。

イエメンの部族社会では食後にカーツを楽しむ慣習がある。軽い覚醒作用のある強い茶葉のようなものであるが、それを食後のお茶の前に噛む。気持ちが良くなるらしいが、茶葉が口に残る感覚はなかなか日本人には馴染めない。そのカーツには新鮮さが求められるが、一部は対岸のエチオピア産である。日常的に消費

されるカーツが海上交易で運ばれるほど経済関係は緊密である。

ソマリアが内戦で荒れた二〇〇五年頃、戦闘を逃れた大勢の難民が海路でアラビア半島に渡り、陸路でサウジアラビアやオマーンに流入する事態が起こった。不法な難民の密入国を阻止したいサウジアラビアやオマーンが国境管理を強化し、主要道路で検問を強化、さらに不法滞在者の検挙を徹底し始めたのは、この時の東アフリカ難民の流入に起因する。検問所には護送車両も待機し、滞在許可を提示できない人々は護送車に放り込まれる。しかし、イエメンを経由する密入国者を完全に捕捉（ほそく）することは、森林か砂漠かという国境の自然環境では現実には困難である。

このように、アラビア半島と「アフリカの角」は古来より続いている共存社会なのである。

イエメンのカーツ畑

※5　ヨーロッパ人は一九四〇年代までエチオピアを「アビシニア」と呼んできた。アビシニアの語源は、アラビア語の「ハバシュ」にあるとされている。つまり、アラブ人は現在のスーダンから西アフリカに至る広い範囲に住んでいるアフリカ人を、スーダン（黒い土地の人）と呼んだのに対し、紅海の両岸、アフリカ大陸側とアラビア半島側に居住した人々のことを「ハバシュ」と呼んでいた。二世紀の末になって南アラビアの碑文に、海を越えてアラビア半島に侵入を図るエチオピア人に関する記事が現れ、次の世紀になると南アラビアの諸王国とエチオピア北部のアクスム王国との戦いや交渉の記事が増加する。